

小泉八雲を知る旅

第3回 ケルト的精神と衝撃体験と

大叔母サラと暮らすようになった八雲。13歳でフランスの神学校へ行かされるまでの幼年期は、当時、イギリス系アイルランド人の裕福な家庭では、学校には行かずに家庭教師による教育が一般的であり、八雲もそうでした。そして、子守役である乳母のキャサリンが彼の世話をしました。

アイルランドは、万物に精霊や神が宿るとする古代ケルトの思想が残り、自然への畏怖が色濃く息づく「妖精の国」。日本の八百万の神に似たアニミズム的な世界観が根付いているといわれます。乳母キャサリンはアイルランド西海岸出身であり、八雲は彼女から妖精の話などをよく聞いて育ちました。また、夏になるとアイルランド西部の親戚の家に滞在し、美しく豊かな自然を肌で感じながら、ケルト的精神が脈打つ民話を多く耳にしました。こうした経験が、目に見えない「異界」を信じる感受性を八雲に養っていったのです。

一方で、八雲は途方もない恐怖に苛まされます。当初、乳母と共に明かりのついた部屋で一緒に寝かされていましたが、やがて明かりのない部屋で、一人で寝かされるようになったのです。すると毎晩、お化けが出てきては幼い八雲を苦しめたそうです。神経過敏で想像力旺盛な八雲。片目の視力を失う前から先天性の近視でもあり、実際に暗黒の中で亡霊のようなもの（ゴースト）を幻視していたのかもしれない。

それにしても、子どもが暗闇を怖がるのは想像力の発達に伴う自然な成長過程であり、母を失った心細さを抱えた八雲には、夜の暗闇はなおさら恐怖だったはず。しかし大叔母サラは、「(ハーンが)暗黒を恐れるから、そんな悪癖を正すため」と考えたようです。彼女の子どもに対する無知には驚きますし、やはり狂信的な信仰心の成せることだったのでしょうか。

恐怖体験では、「のっぺらぼうのジェーン」も。ジェーンとは、毎年サラの家に滞在していた女性で、サラ同様、熱心なカトリック教徒でした。八雲もなついていましたが、ある日、彼女から信仰に関する説教を受けるはめになり、八雲が我慢できなくなって反論めいた疑問を口にすると、今度は彼女は恐ろしい剣幕で彼を叱責。そのあまりの暴言に、八雲は彼女の死を願うほど憎悪しました。

そんなある日、また邸でジェーンを見かけます。八雲が声を掛けると彼女は振り向きませんが、その顔には何もありません。ただ青白いぼんやりとした色が漂っていたのです。それからしばらくして、本物のジェーンが来ます。彼女は、以前あれほど激しく八雲に接したことなどなかったかのようにいつものように優しく、八雲も楽しいひと時を過ごしました。しかし、その滞在時に彼女は病を得て、間もなく死んでしまいます。

ジェーンとのことは自分の胸に収めたままだった八雲。暗闇の夜になると、きっと彼女のことを反芻しては怯えたことでしょう。最後に会うや病気になったジェーンは、あの顔のないジェーンの抜け殻だったのか？ ジェーンは八雲が彼女を憎み、彼女の死を望んだことを知っていたのだろうか？—幼い八雲はそんな思いまで巡らせたようで、ジェーンにまつわる衝撃的な体験は、大変なトラウマになったようです。異界に親しみ、信じるが故になおさら、深い傷が心に刻まれたものと思われる。

SIDE STORY

何がジェーンに起ったか？

1962年公開のアメリカ映画「何がジェーンに起ったか？」。[何がジェーンに起ったか? - Wikipedia](#) 姉妹間のおどろおどろしい嫉妬や罪悪感などが渦巻くサイコホラー作品です。八雲の生涯に登場するジェーンが同じ名前だったので、つい、この映画を思い出しました。

八雲のジェーンは、本当の従妹ではないですが「カズン・ジェーン」と呼ばれていた大叔母サラのお気に入りでした。八雲が彼女について書いた一篇『私の守護天使』を読むと、幼心をときめかすような（美しい？）人でもあったように見受けられます。と同時に、彼女には内に秘めた苦悩があったのか、八雲は悲哀を感じ取っていたようです。そして私には、かなり情緒不安定な女性の印象があります。それが宗教に向かわせたいたのかもかもしれません。

彼女は、さまざまな書物を残して逝きました。ホメロスの長編詩『イーリアス』『オデュッセイア』、『千一夜物語（英語訳）』、パイロンの詩など、それらは八雲が文学の扉を開くきっかけになりました。

そして不思議なことに、それらの中には宗教書は一冊もありませんでした。八雲もこの遺産に感謝しながらその点には驚いています。また、サラに気に入られるほどの信仰心はあるものの、修道女になりたいのかなりたくないのか、不思議なやりとりも八雲とジェーンは交わしています。一体、何がジェーンに起きていたのでしょうか……カルトというかサイケデリックというか、そんな印象のあるミステリアスで不可解な女性です。

八雲の『怪談』の「貉（ムジナ、MUJINA）」には、顔に目・鼻・口の無い妖怪が登場しますが、「のっぺらぼうのジェーン」は、八雲の怪談文学の原点ともいえるのかもかもしれません。のっぺらぼうの民話は日本各地にあり、熊本には「ノッペラポンの話」として伝わっているとか。八雲とトキは、熊本滞在時代にこの類話も収集していたのかもかもしれませんね。